発行日　2011.9.1
Vol. 10

olive・heart

男女共同参画推進室ニュースレター

olive・heart

全学研修会

女性研究者の科学論文作成への道
「看護学研究へのホップ・ステップ－チャレンジ」

看護学は、様々な健康状態にある人の健康回復支援や生活支援を行うための学術分野です。医学部看護学科では、看護学研究のより一層の推進を図ることを目指しています。２回目の今回は上別府圭子氏にご専門の小児がんの長期的なケアや虐待児童の未然防止のプログラムなどの研究についてうかがい、外部資金獲得など研究成果につなげるための具体的な方策や科学論文作成にむけた示唆を得たいと、この企画を致しました。他分野の研究者の方も参加できます。(男女共同参画推進室へ)

日時 平成23年9月9日(金)15:00～17:20

講師　上別府　圭子　氏
【東京大学大学院医学系研究科健康科学　准教授】

場所　看護学科4階会議室

対象　医学部看護学科及び希望する全学教職員
希望する大学院生、医学部付属病院医療スタッフ

講師プロフィール紹介

１９７８年　３月 東京大学医学部保健学科卒業
１９８３年　４月 国家公務員連合会等共済組合　虎の門病院
１９８５年 10月 こどもの城　小児保健部・小児保健クリニック
１９９２年 10月 兵庫県立女性センター
１９９３年　２月 東京大学学位取得（保健学博士）
１９９４年　２月 東京慈恵会医科大学附属病院
２００２年　４月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 助教授
２０１１年　４月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 准教授
現在に至る

主催　香川大学男女共同参画推進室　啓発部門
共催　医学部看護学科研究戦略委員会・教員FD

目次:

児童サマースクール……2
全学研修会　報告……3
幸町参画研修会……4
オープンキャンパス相談コーナー……4

児童サマースクール「医学部探検隊」報告

平成23年8月18日(木)・19日(金)7:30～18:30、医学部看護学科の実習室をお借りして、学内の初めての試み、児童サマースクール「医学部探検隊」を開催し、教職員の小学生の子ども達が18日22名・19日27名参加しました。

この事業は、医学部附属病院ワーク・ライブ・バランス支援室が主催、男女共同参画推進室が共催し計画実施しました。ボランティアとして、香大っこサポーターと医学部看護学科、医学科の学生、総勢20名が協力し、医学部ならではの専門的な体験ワークショップを実施することができました。

初日は、子どもたちは緊張した面持ちでしたが、名札を作ったり班の旗を作ったりするお楽しみ会ですっかり仲よくなりました。宿題タイムの後に、あこがれの学食での昼食。各々がお金を握りしめ、好みのメニューを注文していました。午後は、アカペラサークル「エスポ」や障害児サークル「ひばり」の学生さんが楽しい歌やゲームの企画を提供してくれました。おやつは、お楽しみのかき氷でご機嫌でした。パパママ体験では、松本看護師長の指導の下、赤ちゃん人形の重さを当てたり、だっこやおんぶで重さを確かめたりした後、おしめ交換を体験しました。小さな紙おしめに苦戦しながら、男子も女子も丁寧におしめをあててあげていました。

二日目は、農学部 応用生物科学科 生物資源生産学の松本由樹先生による食育教育「いのちをいただくということ」のお話を聞きました。博物館で実施している「“おいしいお肉の向こうには”展」の内容をコンパクトにして教えていただきました。しっかり考え体験する内容に、大きな子も小さな子も考えさせられたようです。午後の医療体験では、検査部の四宮先生が、実際のエコーを体験させてくださり、地域医療教育支援センターの泉川先生が人体模型を使って詳しく体の仕組みを説明してくださいました。子ども達は、大人用の白衣に聴診器を身に着け、実習用の人形を使って、心臓や肺、胃の音を聞いてみました。その後、高学年は、病理部の見学をしました。大きな電子顕微鏡で組織を観察したり、お話を伺ったりしました。医学部の学生ボランティアさんもたくさん協力してくれました。

最後に、すいか割りをして修了式を行いました。子ども達は口々に「たのしかった！」「学生リーダーがやさしかった」と感想をもらしていました。長時間の保育でしたが、子どもたちは事故もなく楽しく有意義に過ごすことができました。ご協力いただいた学生さん、教職員の皆様、ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

絵日記から

きょうじどうサマースクールに行きました。しゅくだいをおしえてくれたり、カンパンをたべたり、びょういんのたんけんをしたりするサマースクールです。スタッフや先生がおしえてくれたり、赤ペンで丸してくれたりしてくれます。グループをつくってそのグループで一日かつどうします。びょういんたんけんにも行きました。いのこともお話ししてくれました。とってもたのしかったです。リーダーとはなたばもいっぱいつくりました。とおってもたのしかったです。（小２みなみ）

今回お断りした皆様には、お詫び申し上げます。

全学研修会　報告
「研究へのアジェンダ
～“生きる”を支える看護学への示唆～」

あけぼの会は治癒後も在籍し続ける方や、熱心に街頭での啓発活動に取り組んでいる方等、積極的な会員が多いのが特徴です。会員は乳がんの体験者なので、患者の悩みに対する相談員や啓発運動の生きたテキストとしての役割も担っています。

あけぼの会では会員同士のサポートだけではなく、社会に対しても貢献するために会員が体験者としてメッセージを発信しています。活動の一つである母の日キャンペーン活動は、乳がんの早期発見と自己検診を呼びかけるもので、私が乳がんで母親を亡くした子どもと会った時に、のこされた子どもに寂しい思いをさせてはいけないと強く感じたことを契機にスタートしました。乳がんは早期発見が重要で、その為には月1回の自己検診、年に1回の病院での検診が欠かせません。しかし、乳がん検診率はあがっていないのが現状です。自分でみつけられる病気を見過ごして死んでしまうのは本当に勿体ない事です。皆さんも是非検診を受けて下さい。

また、乳がん予防月間には、①治療中の方に愛と勇気をおくる、②亡くなった方を忘れない、③早期発見の重要性を知ってもらうためにという願いを込めて東京タワーをピンクにライトアップしています。乳がん患者にとって、乳がんとは突然降って湧く試練です。何故私なのか、辛い治療や高い医療費、家族への負い目、孤独感等、時には人生への敗北感を感じてしまう程のショックを受けてしまいます。特に①については、そういった方に手術前と同じように生きて欲しい、名誉や自尊心を守って欲しいという思いが込められています。

信念、情熱、
インテリジェンス、
そして人間愛

女性研究者の研究促進にむけ研修会を連続で行っています。

常に新しい事を考えてすぐに実行に移す行動力
ポジティブシンキングでまずやる事が大切

同時に患者団体は医療関係者との連携も重要です。医療関係者に患者に対する人間愛が不可欠なのは勿論なのですが、患者にとっても医療関係者は病気を治し、自らを生かしてくれる存在です。お互いに敬い合ってこそ病気の治癒に取り組めるので、会では医療関係者からの信頼も得られるように努めています。

あけぼの会は面識のない患者同士が、繋がりという掛け替えのない財産を得る事ができる組織であり、乳がんによって傷ついた方にこそ来て欲しいと願っています。女性の社会進出が今ほど進んでなかったの30年前設立当時には、乳がん患者が街中で啓発運動をするという発想自体がありませんでした。それを可能にし、現在も会が存続している理由は、まず私のモットーでもある、常に新しい事を考えてすぐに実行に移す行動力が挙げられます。最初に駄目な場合を考えるのではなく、ポジティブシンキングでまずやる事が大切です。人間の人生は縛られたものではありません。会員が自分自身の人生を生きる手助けができればと考えています。同時に、支援してくれる人との信頼関係も欠かせません。お互いを尊敬しあい、大勢の方が後押しをして下さいました。次に、日々増え続ける乳がん患者や、会員を支える為にはやめられないという使命感があります。やってみなくては分からないと懸命に活動に取り組む私の姿を見て、会員達はついてきてくれました。これからは会員それぞれが独立して会を支えていってくれる事を期待しています。また、ある新聞記者に「女性の始めたものは当初の目的を見失い、長続きしない。」と言われた事も大きいです。厳しい指摘であると同時に、得難いアドバイスでもある言葉をかけられ、そうはすまいと意志を強く持つ事ができました。個人的にはこの会は日本の女性会史に残るものになったのではないかと感じています。

この様にあけぼの会の設立、維持は強い情熱に支えられてきました。活動は大変苦しいものではありますが、同時に私の人生を豊かにしてくれました。純粋に打ち込める天職であったように感じています。

ワット 隆子　氏

【あけぼの会会長】

自らの体験を生かして、乳がん体験者の全国的なセルフ・ヘルプグループ「あけぼの会」を組織。30年間代表として活躍。女性主体の患者会として、さまざまなソーシャルアクションを展開してきた。

会長として、乳がん早期発見の啓蒙のために乳がん月間、母の日キャンペーンなどを毎年、実施。機関紙『曙』、AKEBONONEWSなど印刷物の発行。ABCSS病医院訪問ボランティアなど積極的な活動を展開している。

2006年8月現在の会員数
4,350名、40支部、顧問医70名。

主な受賞
1987年エイボン女性教育賞
1988年保健文化賞
2000年テレサ・ラッサー賞

幸町啓発講座

「どうして男女平等が大学に求められているのか？」

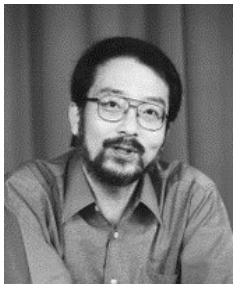
講師の諸橋泰樹氏は、メディア、ジェンダー、社会意識などをカルチュラルスタディーズ、ポストコロニアリズムの立場から調査研究する傍ら、男女共同参画行政の審議会委員や男女平等推進センターの講師などとして活躍されています。今回は、世界の男女平等の流れと日本の男女平等の実態との乖離、大学における女性の研究者・職員を取り巻くジェンダー問題、政府の男女共同参画施策などについてのほか、大学で取り組むべき男女共同参画について、ご講演いただきます。

日時　平成２３年９月２１日(水)１６：００～１７：３０

講師　諸橋泰樹　氏
【フェリス女学院文学部コミュニケーション学科教授】

場所　313講義室（幸町北３号館１階）

☆当日参加可能（他学部の教職員の方も参加できます。）



講師プロフィール紹介　諸橋　泰樹　氏

フェリス女学院大学教員／渋谷区男女共同参画アドバイザー

1956年生まれ。成城大学大学院在学中より日本新聞協会研究所の委嘱研究員としてマスコミ研究や各種調査に従事、尚美学園短期大学教員を経て現職。現在は和光市男女共同参画審議会会長、埼玉県男女共同参画審議会会長代行、日本出版学会副会長などを務めている。

著書紹介

「ジェンダーというメガネ」
～やさしい女性学～

キミは女性に生まれ、男性に生まれるのではない。女性に「なり」、男性に「なる」のだ。つくられた枠にきゅうくつにおさまってることなんかない。自分をだいじに元気に生きよう。これからの世の中は個人の多様性がキーワード。「女性・男性」というフィクションを解体し、合わないメガネを取り替えたくなる一冊。
（フェリス女学院大/2003年）

他主な著書：『メディアリテラシーとジェンダー』（現代書館／2009年）、『ジェンダーとジャーナリズムのはざまで』（批評社／2005年）、『ジェンダーの語られ方、メディアのつくられ方』（現代書館／2002年）

オープンキャンパスに相談コーナーを設置しました

平成23年8月11日(木) 農学部と工学部のオープンキャンパスの会場に、学生による相談コーナーを設置し、両学部で80名近い相談がありました。

農学部では、12:30～15:30の3時間、4人の女子大学院生が自らの研究や進路について紹介しながら相談を実施しました。女子限定の窓口として設定したため、たくさんの女子高生が訪れました。

工学部では、10:00～11:30･13:30～15:00の2部構成で、女子5名・男子3名の学生が男女の高校生の相談に応じました。工学部では、オープンスクールの来場者自体、圧倒的に男子が多い中、女性の先輩と直接ゆっくり相談をすることができました。当日に向けて作成した「香川大学　女性研究者・卒業生　ロールモデル集」を参加者全員に配布し、相談窓口の広報を行いました。相談の場面でも、ロールモデル集を示しながら高校生の質問に応じることが出来たようです。相談コーナーには、女性研究者の先生方にいていただいたため、詳しい大学の研究内容については、女性研究者が説明を行うことができました。

ご協力くださった皆様ありがとうございました。

olive・heart

香川大学男女共同参画推進室

香川県高松市幸町１－１
北5号館１階

電話：０８７（８３２）１０５５
内線：1055
FAX：０８７（８３２）１０５７
電子メール：
sankaku-room@ao.kagawa-u.ac.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：
http://www.kagawa-u.ac.jp/sankaku/